
彼女を守る!!

又二郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女を守る！！

【Nコード】

N2916N

【作者名】

又二郎

【あらすじ】

学年トップの人気女子。僕はそんな彼女に恋をするが、普段は彼女を見ているだけで…でも今日はクラスに不良たちが乗り込んだ！僕は彼女を守るのか！！

（前書き）

こんなへっぽこ作者の小説、見てくれるとうれしいです!!

なんて…なんて魅力的な女の子なんだろう…

他の女の子とは比べるまでもなく、彼女の魅力は一目瞭然だった。

「…綾瀬さん……………はあ」

僕は教室で友達と談笑する『彼女』を眺め、浅い溜息をつく
そんな僕を見て、僕の親友Aは呆れたように肩をすくめた。

「お前まだ綾瀬綾瀬なんて言ってるのか？……ったく、悪いことは
いわねえ綾瀬は諦めろ。……ってこの忠告はもう何度言っただろうか
……」

「う、うるさいな。憧れるくらいなら僕の勝手だろ、綾瀬さんは彼
氏もいないんだし、彼女に干渉しないように憧れるなら誰にも迷惑
はかからない。」

「だああああ…俺はそんな健気なお前を見るのが苦痛で仕方ねえっ
つの…つかこれ、俺には迷惑掛かってるよな？な？」

「…んなこと知らん」

「何故！？おまつ、俺たち親友だろ！？ほら、親友の俺の名前を言
ってみろ！？」

「…親友A。」

「最高の名前をありがとう、その名前を聞いただけで俺が親友だっ
てこと、わかるよ。」

ついでに名前からこの物語での活躍の小ささを確信した親友Aは、
僕の席につっぱした

そんな親友Aを一瞥した僕は、綾瀬さんを見つめなおす。

長く、乱れのない黒髪。

くりつとした大きな目。

このクラス…いや、この学年一といっていい程に整った顔。

これだけでも人気が出てくる要素は満載だが、彼女の一番の人気は人当たりのいい性格からでもある。

僕はそんな彼女のファンの一人なわけであるが、彼女との直接的な関係は一切求めていない
なぜなら彼女と僕は住む世界が違う。

異性に全く免疫のなく、ルックスも高くなく、クラスで目立っているわけでもなく、運動ができるわけでもなく…と悪いところを挙げたらきりがなく僕と彼女とは釣り合わないのがいい理由だと自分でも理解している。

僕はただの果物屋さんの息子。彼女は学年トップの美女。まさに美女と野獣…いや美女と果物屋。

だから僕はファンでありながら、綾瀬さんに近づくつもりはない。
僕は…

「こうして見ているだけで、幸せだか「るせえ!!」つくばほ!!」
とろんと間の抜けた顔で綾瀬さんを見つめていた僕に、親友Aの顔面ぱんちが綺麗に決まった

首を捻じらせながら僕は椅子の上から転がり落ちた。

「く…っ、な、なんだよ親友A、お前、そんなに名前が親友Aって

気に入らないのかよ…だったらもつと個性の濃いキャラに…」

「いらんお世話

——っ！！？」

僕は床から体だけ離し、床に座り込む体制で親友Aと向き合う

「だっておま、今のキャラだと、だたのクラスメイトじゃん。ほら、あのボケとツツコミ達人の親友関係もない僕とお前じゃ、少なくとも友達以上でもないし。」

「過去に傷跡のある二人と俺達を比べないで！？放課後のグラウンドで殴りあった二人と比べないでよ！！？それと便座カバー！」

「っーかネタわかってんのか読者！！？」

「一人称が『僕』だから、僕がツツコミだね…」

「それ以上はらめえ！！！」

いやきもいから。

「んで何さ、急に殴りかかってきて。僕何かしたかな？？」

改めて体だけを起こし、親友Aと向き合うところからリピートした
(親友Aの要望)僕はそう訪ねる

「お前はさ、昔からそういうやつだって知ってるけどよ…でも、そんな地味に眺めるなんてこといつまでも続けててもお前は一生報われないっつーか、一生果物屋の息子っつーか…こういつちやなんだが、お前人生の中で成功した恋がいくつあるよ？？」

「お前ほんとに失礼だよ…でもそうだなあ、実った恋、かあ…」

僕は今までの人生を掘りなおして思いかえしてみる

…

……

………ないな。僕異性に免疫ないし。

「どうせないんだろう？わかってるよ、お前はいつでも異性と会話すら成り立たないからなあ。」

当たり前のように言い切る親友Aを見て、ここで素直に答えるのは負けた気がすると悟る。

「…あるよ。」

「だろ？だからただ見てるなんて……は??」

「だからあるんだって、実った恋くらい。ひとつやふたつ。」

「もつとk w s k…ってうそつけ！あきらかに嘘だろうが!!」

「あの日僕は、たし力、珍シク朝寝坊シテ起床シテイタ…気持チノ
イイ、朝ダツタ…僕ハ、食パンヲ銜エテ…」

「曲がり角で事故る展開!!?」

「アノ三丁目ノ角デ、ブツカッタ彼女ハ…僕ノ幼馴染デアリ、カワイイ宇宙人…」

「いろいろ混ざった!!?」

「更ニ、ソノ日、僕ノクラスニハ、転入生ガ…」

「ギャルゲだ

っ！！？」

「シカモ三日続ケテ転入生…」

「まさか擬人化！！？」

「…とか妄想の中で、ね。実ってた。」

「嘘かよ！？焦って流れ出てきた汗を返せ！！俺の驚きを返せ！！」
「信じるほうが悪いよ。」

「ひでえ——…っ」

「綾瀬はいるか！！？」

親友Aの叫びを遮るかのように、僕のクラスにずかずかと何人かの不良が怒鳴りながら姿を表した。

「…」

「…」

僕と親友Aは二人そのまま固まってしまいが、親友Aと目だけで会話を始めた。

（お、おい、なんだありゃ。綾瀬の友達か？）

（いや常に観察してきたけど、あんな人たち綾瀬さんとはなにも…）

（んじゃ、なんだよあの危なそうな集団は！？）

（さ、さあ…）

僕達二人を加えたクラスの皆が、窓際に追い詰められた綾瀬さんと追い込んだ不良たちを見る

…先程綾瀬さんと談笑していた女の子は、危険を悟って綾瀬さんから距離をとっていた。

（…皆薄情者、だね。）

僕の再び送った目の会話に親友Aが応じる

（誰だって自分の命が惜しいんだろ？）

（…）

僕と親友Aはそれだけ会話すると視線を戻した。

「綾瀬、昨日の続きを聞かせてもらおうか…」

不良たちの先頭に立ったゴツイ男が綾瀬さんに話しかける

「その話はもう終わったはずです、何度言っても私はあなたの期待には答えられません！」

綾瀬さんの鋭い目つきに、ゴツイ男は口の端を釣り上げた。

「へへ…釣れないなあ綾瀬、俺の女になれば…いや、俺に一日だけでも体を貸してくれりゃー…この学園でいい顔させられるってのによお…何が不満なんだ？ええ？？」

「そんな口説き文句で女の子が喜ぶと思ってるんですか？最低です！」

「喜ぶ女もいるんだぜ綾瀬さんよあ…あんたにはわかんないと思うが、世の中にはそーゆー女もいるんだ…なんなら、その体に教えてやっても…」

（おいおい、いい雰囲気じゃねーよ…なあ…？）

（僕が行く。）

（行く？行くって…なんだ？あ、おい！！ちょっとまじかよ！！？）

僕が、守る――。

「や、やめろよ。」

僕は…

ゴツイ男と綾瀬さんの間に立ちふさがった
当然、その行為に不良はいい顔なんてしない。

「なんだお前？」

「…っ」

不良たちの前に出てきたのはよかったが、それ以降の事は予定して
いない

それゆえゴツイ男の問いかけに返事が出てこない。

僕は口を固く閉じ、頭の下げる。

この時のクラスの人達の心の声

()()(電車の男がお前は

!!!!!!!!!!?)()()

「今忙しいんだよ、おら、どけカスが——っお？」

僕を払いのけようと手を伸ばしかけたゴツイ男に向かって、僕が先
に手を伸ばした
その手には…

僕の手握ったものを見て、クラスにざわめきが起こる。

「あ…あれは…」

「まさかあいつ…」

「正気か！？あのネタはっ！！」

…そう、僕の手にはバナナ

僕の家の果物屋さんから持ってきたバナナだ。

僕は何も言わず、そのバナナを…握り潰した。

…ぶちゅっ

「……今鳥さああああああああああああああん！！

！！！！」

クラスの驚愕の声と、僕の姿を見て、ゴツイ男は薄く笑うと、仲間の不良からリンゴを要求した。

「ふんっバナナごときで満足とは、面白い冗談だ…それじゃお礼に、本場の握力を、見せてやん…よっ！！」

ばりいいいっ

ゴツイ男の掌の中で、リンゴがはじけた

同時にクラスからぱらぱらと拍手が起こる。

ゴツイ男は手に残ったリンゴを口に頬張ると、僕の胸倉をつかむ

「これで満足か…？」

「…」

僕は何も言えない、でも目的は果たせた。今の一瞬で綾瀬さんをここから…

「いい意加減にしてよ!!」

ここから…

「もう…もう帰って!!」

あれ、今の一瞬で逃げてもらうというお約束だったのに…ナンデ僕ノ後ロニイルノ??

「君も、もういいから、危ないから、私から離れて…」

そう言って彼女は、僕の手を引っ張るようにして不良たちから遠ざける

胸倉をつかんでいたゴツイ男も、綾瀬さんが諦めたと思い。僕から手を離して綾瀬さんに歩み寄る。

「どうしたんだあ？綾瀬さんよお…？」

「…」

綾瀬さんは、顔を下に向けたまま黙り込む。

「俺の女になる気にはなったかあ…？」

僕は――

本当に駄目だな…綾瀬さんに近づくどころか、彼女を守ることでもできないんだな…はは。

でも、今つながっているこの手は…僕が普段から憧れている人の…手。

やっぱり僕の妄想していた通り、暖かくて…柔らかくて…細くて…

こんな状況だけど、幸せだなあ…普段妄想の中でしか触れたことのないこの手の感触が味わえるなら、不良たちの前に勇気出して飛び込んだのは正解だって思えるよ。

…でも、

僕の妄想とは違うところが一つ。

その手は、僕の普段妄想していた手は、暖かくても柔らかくてもほつそりした指でもあったけど――こんなに震えてはなかった。こんなに怯えてはなかった。

「綾瀬さん、ごめん」

「…え？」

小さくつぶやいた僕の声に、綾瀬さんは顔をあげて僕を見た。

「僕、結構贅沢なやつなんだってわかった…ははは。」

「え、え…なにが…」

僕は再び不良の前に立ちはだかる。

…親友Aは僕のすることを悟り、自分の音楽プレイヤーから最大音量でゲームか何かのクライマックスにかかりそうなBGMを流し始めた。

あー…僕は欲張りだなあ、ただ綾瀬さんを守ろうとして飛び出してきたのに、綾瀬さんの手に触れた途端に―――守るだけじゃなくて、この震えも止めてみたいとか考えるなんて、笑えるよ。

心の中で自分を笑いながらも、僕の表情は鋭い目つきで不良たちを見つめる

意外な僕の行動にゴツイ男は少し戸惑ったが

「なんだ、まだなんか用があんのか？次は本場の握力じゃなく、本場の喧嘩を体験させてやるぜえお兄さんよ…??」

「本場、か。」

「あん？」

「だったら僕も、本場の実力をみせてやるよ。」

「んだとっ!!?」

怒鳴るゴツイ男の目の前に、僕は制服の中に入れておいたリンゴを取り出した。

「これ…握りつぶしてみてよ。」

にやりと余裕を見せる僕に、冷や汗を流しながらゴツイ男はリンゴをひったくる

「な、なめやがって…見てろ!!」

ぎりぎり…

ゴツイ男がさつきと同様に手に力を込め始める。

「知ってる?リンゴの本場を…?」

ぎりぎりぎりぎり…

「あんなスーパーの低価格なリンゴとはわけが違う…そう、僕の家
のリンゴは…」

「なっ…!つぶ、潰れねえ!!潰れねえよお!!」

いくら握っても潰れないリンゴに、不良たちは焦り始め、僕の話
を聞いていないのだが僕は話し続ける。

「青森県産なんだよおおおおおおおおおおおおおおおお
おお!!!!!!」

「ぐあああああ!!」

びきびきびきびきっ!

ついに力に耐えきれなくなったゴツイ男の指が限界突破、まあいろいろ力の原理でゴツイ男の指の骨は砕けた……いや、ホント、力の原理で。うん。

男の手からリンゴが落ちる……そして手首を抑えるゴツイ男に一言……

「本場のリングを……なめるなあ　あああああああああああ
ああああああああ!!!!」

「ひええええ！リング怖い！いいいいいい！！」

僕の制服からリングが滝のように雪崩れ始め、ゴツイ男は泣きながら逃げだした。

「ま、待つてくださいゴツイ男さん!!」

「綾瀬さんは……僕が」

そう、
僕が

「守る……！」

と、心の中でかっこいい台詞を言ったものの、現実の僕は皆の視線に耐えきれず教室から走り去ったのであった……

「いやあ、お見事でしたなー……まさかりンゴで……」

帰り道、いつものように僕は親友Aと駄弁りながら家に続く道を歩く。

「……はあ、駄目だ、明日から学校、いやクラス、いや……綾瀬さんの視界に入れないよ……」

何百回かわからないけど、とにかく本日溜息の回数レコード更新中
沈んだ雰囲気の僕とは逆に、親友Aは笑顔で僕の背中をたたく。

「何言つてんだ！お前、どさくさにまぎれて綾瀬の手握ってただ
ろ！それに勇気出して助けたんだから、きつとフラグもたってるぜ
！！」

「…現実とギャルゲをこっちゃにしてちゃ駄目だよ。」

「ひでえ！？お前今日思い切りギャルゲの妄想話を…」

「ああ、どうしよう…」

「漏れの話を聞け

」

「だが断る…「ちょっとー！！」「…ん??」

僕がいつも通りうるさい親友Aに顔をしかめていると、後ろからか
なりのかわいらしい声が聞こえてきた。

「…え。」

「…はあっやつと追い付いた！なんでお礼も聞かずに帰っちゃうか
な！！」

「ちょ、え、あえ…??」

「今日はありがとね！…それじゃ、帰ろっか！！」

…超展開キターっ

「な、なんで、い、い、い、一緒に、帰る、の??」

僕は動揺しまくりの頭を落ちつけながら、ガクガクは口を動かした。

て、細くて…それは、僕の想像通りの手だった

(後書き)

ご鑑賞、ありがとうございました!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2916n/>

彼女を守る!!

2011年1月19日05時02分発行